

Topics | 開館20周年記念 初期浮世絵展 -版の力・筆の力-
新寄贈寄託作品展 -花づくし



杉村治兵衛《遊歩美人図》大々版墨摺筆彩
貞享期(1684-88)頃 シカゴ美術館蔵
Photography©The Art Institute of Chicago



あけましておめでとうございます。旧年中は様々、ありがとうございました。皆さまからの支援ならびに、ご指導賜りましたことに、対し、厚くお礼申しあげます。

2015年は、当千葉市美術館にとりまして、開館20周年の年にあたり、年度初めの4月から、これを記念する特別展を開催してまいりました。幸いどの展覧会も、当初の予想をうわまわる、多くの方々にご来場頂きました。皆さまには、お楽しみ頂けたものと思います。

年度としては最後の20周年記念の催しとなる「初期浮世絵展一版の力・筆の力」が、2016年1月9日からじまります。

この展覧会は、担当学芸員である田辺昌子が、本ニュースの次頁で述べるように、春信、清長、歌麿、写楽、北斎、広重、さらには近年注目の国芳などの、いわゆる黄金時代、中期から後期のそれではなく、そのはじまり(つまり初期の浮世絵)がどんなものか、またそれが浮世絵とされる理由や意味などを、現存する作品の展示を通して、明かにすることを目指しています。

ところで、わたしが浮世絵について学んだのは、大学の専門教育課程で、渋井清先生の講筵に連なる機会を得たその時でした。先生は、慶應義塾に学び、近代における美術史研究の父とされるH. ヴェルフリン教授の美術史方法論を正統に日本に伝えた沢木四方吉先生のもとで研鑽を重ね、浮世絵研究を、好事家の学から、実証的で科学的な学問とした最初の人と言ってよいとわたしは思っています。「渋井コレクションの主^{あるじ}」とも呼ばれる一流の浮世絵コレクターであった先生は、しばしば「遊^{あそ}び(遊び)」という言葉を使われましたが、それは一般的にいう趣味の領域に属するようなものではありません。現代美術家の杉本博司さんが、趣味を道楽と言いかけているのと良く似ています。因みに、哲学者のカントは、「趣味」とは「対象を美しいと判定する美的判断力の一つ」と規定しています。ここで言う趣味とは単なる好みや余技的な楽しみを指すのではないのです。

先生の浮世絵に関するお考えは、名著『江戸の板画 甦える美』(桃源社刊、昭和40年)に明らかにされています。わたしの浮世絵に関する浅い理解も、いわばここに依存していることを素直に告白します。

先生は、浮世絵を「ウキヨエ」、版画を「板画」という呼び方を好んで使われています。この用語は、いまだ十分に世に広がっていませんが、わたしは「浮世絵版画」の内容を表す語としては、先生の用語の方が的を射たものと考えます。

「うきよ、これがあるがために、わたくしは、ウキヨエを愛す」と、上記の著書のなかで力強く語られます。そして「江戸の、京・大坂の、うき世、と多少味のちがったところはあっても、しかし、とにかく、江戸の浮世という一帯的世界がありました」と。

すなわち、ここに「ウキヨエ板画」は生まれたのです。

本稿では、先生のご高著の説くところに従い、以下に長い引用をもって「初期浮世絵」について紹介したいと思います。

「江戸に、浮世とともに、ウキヨエの発生をみるのでありますが、その浮世を視覚的に、板画技術をもって表現したものが、江戸板木絵つまりウキヨエなのであります」と述べ、次いで「ウキヨエの発生

は、絵画と作本と板画との三つ巴の三者集合の渦巻の激流の中から生じたものであって、(中略)肉筆画家として止まった宮川長春や、浮世絵師を誇りとして、板画という物理的処理の加わったものでも、絵本形式の作品範囲に止まって、それ以下には降って来なかった菱川師宣の如きは、未だ以って下から生え上った真の地生えの江戸板木絵師とはいうことは出来ません」と喝破するのです。

さらに『江戸図鑑綱目』(元禄2年刊)を引き、〈浮世絵師の部〉に 橘丁 菱川吉兵衛師宣 同 菱川吉左衛門師房 と、師宣父子をかかげ、〈板木下絵師〉と区別して、通油町 杉村治兵衛正高 長谷川町 古山太郎兵衛(中略)の名をかかげています。そして、「一枚の板木絵をつくることは、一冊の板本を作るより簡単であるので、杉村治兵衛や古山太郎兵衛以外にも、無名の板木絵師が可也いたであろうことは容易に想像されます」と述べています。つまり、師宣と治兵衛との間には、明らかな「身分的区別」のあることを指摘されたのです。

浮世絵版画は、板木下絵師によって始まるのです。浮世絵師の誇りをもち「日本絵^{やまとえ}菱川」を標榜した菱川吉兵衛。〈唐の大和の古伝に、菱川一流の当風を画き加え〉といい、「板本によって、絵画ごころを庶民にあたえ、自らも庶民絵師の師表たることを宣伝し〈師宣〉と号した」と菱川師宣を、浮世絵版画(板画)の祖とするのには慎重な^{スタンス}立場なのです。紙幅は限られています。これ以上の引用は許されません。

先生は、大学の講義のなかでも、初期の浮世絵については、力を入れて話されましたが、特に杉村治兵衛の重要性を述べられたことは、深くわたしの記憶に残っています。

浮世絵の始まりを、桃山時代にまで遡らせ「近世初期風俗画」とか「初期肉筆浮世絵」などと呼び、その祖を岩佐又兵衛とし、「浮世又兵衛」などと呼ぶ説は、すでに色褪せ、受け容れられない傾向が強くなったとはいえ、いまだ判然としないところがあります。

結論を急ぐのではありませんが、わたしの理解する「浮世絵」とは、画く人、描かれる人々、それを鑑賞・享受する人が、皆、同一の地表の上に立っているということではないかと思うのです。それが「初期肉筆浮世絵」などとは違うのです。浮世絵が、庶民の絵画、庶民の芸術と言われる所以もそこにあるでしょう。師宣も治兵衛もそうした時代を迎えたとき登場するのです。わたしの言葉は、まことに舌足らずであります。まずは、展覧会ご鑑賞の皆様が、ご自身の目で、肌で感じて下さる事こそ肝要かと思います。どうぞ存分にお楽しみください。本年もよろしくお願い申し上げます。

〔館長 河合正朝〕



菱川師宣 《衝立のかけ》
転合絵(枕絵)組物のうち 千葉市美術館蔵



杉村治兵衛 《あふまてのおもひは…》
旧渋井コレクション

初期浮世絵展 版の力・筆の力

江戸時代前期の浮世絵展



菱川師宣 《地藏菩薩像》
絹本着色1幅
貞享(1684-88)-元禄(1688-1704)前期
大英博物館蔵
The British Museum, 1913, 0501, 0.372,
donated by Sir William Gwynne-Evans
©Trustees of the British Museum

師宣はしばしば仏画も手がけていました。房州
では寺社の仕事が多かったようです。



菱川吉左衛門 《柿本人麿像》
縫箔刺繍1幅 慶安2年(1649)
個人蔵

師宣の父吉左衛門の刺繍による
作品。師宣は子どもの頃からこの
ような日本絵画の伝統的な図柄
を学んでいたのでしょうか。

浮世絵の展覧会といいますと、喜多川歌麿(1753?-1804)や東洲斎写楽の活躍した「浮世絵の黄金時代」と呼ばれた時代の作品、葛飾北斎(1760-1849)の「富嶽三十六景」や歌川広重(1797-1858)の「東海道五十三次」のシリーズに代表される風景画などを真っ先に思い起こされる方が多いのではないのでしょうか。毎年多くの浮世絵展が全国で開かれていますが、ほとんどの展覧会は、江戸時代後半(18世紀後期～幕末期)の浮世絵を中心に構成しています。今回の「初期浮世絵展」は、これより時代をはるかに遡って、浮世絵発生の前後から展覧し、「黄金時代」には至らずに終わるというのですから、少々あまのじゃく、天邪鬼な内容とも言えるかもしれません。

しかし浮世絵の歴史は、「黄金時代」より100年以上前から始まっています。浮世絵の始祖と位置付けられる菱川師宣(?-1694)の名が最初に作品に表れるのが、寛文12年(1672)の墨摺絵本『武家百人一首』で、浮世絵という言葉が文献に確認されるのは延宝(1673-81)末期のことです。例えば歌麿が活躍したのは、主に寛政期(1789-1801)、北斎の「富嶽三十六景」が天保(1830-44)初期の制作ですから、その前にずいぶん長い歴史のあったことがわかります。今回展覧会のキャッチコピーを「一そして浮世は続く」としたのも、浮世絵が始まったことよりも、続いたということに意義を覚えたからです。それではなぜ浮世絵は、幕末・明治期に至るまで発展し、継続できたのでしょうか。

「版の力・筆の力」と題したように、展覧会では版画、肉筆画双方の魅力をお伝えするつもりですが、浮世絵が浮世絵らしい特色を備えたのは、版による力が大きいと思われます。房州保田(現・千葉県鋸南町保田)の縫箔師菱川吉左衛門の子として生まれた師宣は、若い時に江戸に出て、肉筆の風俗画の一方で絵入版本の挿絵などを手掛けていた絵師集団の影響下に加わったのではないかと想像されます。その頃はまだ出版界の中心は上方にありましたが、新しい都市文化の興隆に伴って徐々に江戸へと移りつつあった時代でもありました。

延宝(1673-81)後期～天和期(1681-84)頃には、江戸の出版文化も安定して独自性を持ち、活発な出版が行われるようになります。師宣も、肉筆画に筆を執る一方で、絵を中心にした版本(絵本)、また1枚摺の組物の作品を本格的に手掛け始めました。人々が江戸の地に愛着を持ち始めたこの時期の江戸自慢の気風にも乗って、美人、歌舞伎、江戸名所が多く主題に取り入れられ、浮世の言葉の流行と共に浮世絵は誕生したのです。

絵が木版によって制作されたことは、その後の浮世絵の展開に非常に大きな意義を持っています。何枚も同じ絵が量産されることで、価格も安く、多くの人々が絵を手にとることができるようになったのです。絵師をはじめ制作者側も、人々が今興味を持っていることを画題とするように努めました。短い時間で大量に制作できる木版画は、今の流行をすぐに取り入れることに都合のよい手法でした。多くの人々が浮世絵という商品に強く興味を持続けるような主題を取り入れ、薄利多売の合理的な採算を維持したことは、浮世絵が存続できた大きな理由であったと考えられます。

師宣以前に風俗画を手がける町絵師が作品に名前を示すことなどなかったことを考えると、上記の墨摺絵本『武家百人一首』に師宣の名前が記されたのは極めて異例なことでした。それ以前に実力を認められていたであろうことも確かですが、版本において絵師の名前を知らせることのメリットとは？と考えてみるならば、版元は才能ある師宣という絵師をスターにして、名前で売るという商法を考えはじめていたのかもしれませんが。町絵師をスターにする、これこそ江戸らしい新しい発想でもありました。

原価を抑えて大量に売る採算の中でも、守るべき美意識を絶やさなかったことも重要です。初期浮世絵の歴史は、採算と美しさを両立させるための努力の過程でもあります。師宣や続く杉村治兵衛(生没年不詳)の時代は、墨摺絵を基本とし、一部の特製品だけに筆で彩色をしていました。その後比較的扱い易かったと思われる丹を機械的に筆彩色した丹絵、少し高級であっても長く江戸の人々に好まれた紅を彩色した紅絵、そしていよいよ版での彩色の時代となりますが、最初は2、3色程度の簡単な多色摺、すなわち紅摺絵で、やがて高度な多色摺木版画技法による錦絵が完成するのです。

初期浮世絵は、その重要性は認められながらも、最も展覧会の開き難いテーマでもあります。まず古いだけに作品が非常に少なく、複製制作されたはずの版画作品も、世界に1点しか確認されていない場合が多いのです。また重要な作品の多くが海外に所在していること、それだけに一般的な知名度が低いという問題もあります。

開館20周年を迎えた千葉市美術館は、開館記念展の「喜多川歌麿展」以来、「歌川国芳展」「菱川師宣展」「鈴木春信展」「鳥居清長展」など、継続的に浮世絵の展覧会を開催してきましたが、初期浮世絵は是非取り組むべき課題であろうと考えていました。また千葉は浮世絵の始祖菱川師宣が誕生した地でもあります。

初期浮世絵のまっすぐに表現に向かって版に立ち向かうプリミティヴで力強いあり方には、いわゆる「黄金時代」とも違った魅力があります。大英博物館、シカゴ美術館、ホノルル美術館をはじめ国内外の所蔵者にご協力をいただきました版画と肉筆画約200点により、浮世絵草創期の世界を紹介する空前の規模の「初期浮世絵展」を是非お楽しみください。

[副館長兼学芸課長 田辺昌子]



鳥居清倍 《金太郎と熊》 大々判丹絵
正徳期(1711-16)頃 ホノルル美術館蔵
Honolulu Museum of Art Gift of James A.
Michener, 1975 (16576)

力強い初期浮世絵版画の代表格が鳥居清倍による丹絵です。鳥居家は現代も歌舞伎の絵看板を手がけています。



懐月堂安度 《立美人図》 紙本着色1幅 宝永-正徳期(1704-16)
千葉市美術館蔵

浮世絵版画の繁栄に対抗するように肉筆量産方式で美人図を多く残したのが懐月堂派です。早く仕上げるための筆の勢いが特徴です。



杉村治兵衛 《遊歩美人図》 大々判墨摺筆彩
貞享期(1684-88)頃 シカゴ美術館蔵
The Art Institute of Chicago Clarence
Buckingham Collection, 1957.558
Photography ©The Art Institute of Chicago

本格的に1枚の版画が単独で鑑賞されるようになった頃の作品。治兵衛は、忠臣蔵で有名な赤穂浪士の1人の中村喜兵衛の養父、九太夫の甥にあたります。

関連イベント

■新春の獅子舞

1月9日(土)の開場時には、8階会場入口で獅子舞がお迎えます。
【出演】登渡神社登戸神楽囃子連

■特別企画

「寛文美人から元禄美人へー髪結いの実演と解説」

【解説】村田孝子(ポーラ文化研究所)

【結髪師】林照乃

1月16日(土)14:00～(13:30開場予定)／11階講堂にて／観覧無料

※実演中の会場の出入りは自由です。

※混雑状況によって入場を制限する場合がございます。

■講演会「愛しい初期浮世絵版画ー美しさ・力強さ・ユーモアー」

【講師】武藤純子(清泉女子大学兼任講師・文学博士)

2月6日(土)14:00より(13:30開場予定)／11階講堂にて／聴講無料／先着150名(当日12:00より11階にて整理券配布)

■美術館ボランティアスタッフによる多色摺ワークショップ

1月24日(日)10:30～12:00、13:30～15:00

※時間内随時受付／1階エントランスにて／先着100名／参加無料

■市民美術講座

「千葉で生まれた浮世絵の始祖 菱川師宣」

【講師】田辺昌子(当館副館長兼学芸課長)

2月7日(日)14:00より(13:30開場)／11階講堂にて／聴講無料

／先着150名

開館20周年記念 初期浮世絵展ー版の力・筆の力ー

2016年1月9日(土)▷2月28日(日)

【休館日】 2月1日(月)、2月15日(月)

【観覧料】 一般1,200円(1,000円) 大学生700円(500円)

※()内は前売券、団体20名以上の料金

※市内在住65歳以上の方は一般料金より2割引

※小・中学生、高校生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※前売券はローソンチケット[Lコード:35558]、セブンイレブン[セブンチケット]および、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(2月28日まで)にて販売

☆きもの割引 きものを着て来館の方は観覧料2割引

☆ごひいき割引 本展チケット(有料)半券のご提示で、会期中2回目以降の観覧料2割引



「初期浮世絵展」オリジナルどらやき&グッズ販売のお知らせ

「初期浮世絵展ー版の力・筆の力ー」のメインビジュアルとなったのは、当館所蔵の初代鳥居清信《二代目市川団十郎の虎退治》。鳥居派は代々、江戸で芝居小屋の絵看板を制作してきました。看板だけでなく、役者絵の版画を中心に手がけて人気を博します。筋骨隆々とした様を描く独特の描法「瓢箪足蚯蚓描」は、団十郎の演ずる源太がいまにも虎の口を裂こうとしている力強さを見事に表しています。千葉市美術館が所蔵する初期浮世絵の中でもっとも重要な1点ということで、今回の展覧会ではチラシやポスターに使用しました。ポスターデザインの金色と黒のツートーンは作品の力強さを強調するとともに、新春らしく華やかな印象が出るように考えられたものです。

展覧会のオリジナルグッズもこの作品をモチーフにしたものをご用意しています。まずは、千葉市内の和菓子屋「虎屋」とコラボレーションしたどらやきです。団十郎の顔を焼き印にしたので、少し食べづらい！？と思われるかもしれませんが、展覧会で疲れた体に染みる美味しさです。7階ミュージアムショップと虎屋で販売するほか、11階のレストラン「かぼちゃわいん」では、お抹茶と一緒に召し上がりいただけます。鑑賞後のご休憩にいかがでしょうか。

また、人気グッズのオリジナル絆創膏に新デザインが入荷します。賑やかなおもちゃ絵や、かわいい琳派でお馴染みの神坂雪佳の子犬、そしてどらやきにも使用した虎退治と、動物づくしで第1弾よりもさらに可愛くなった「どうぶつばん! 2」。これまでに販売した三種

も再入荷し、ちょっとしたお土産にもぴったりです。

今後も展覧会に合わせてグッズやメニューを考案していく予定です。ので、ご注目ください。

【広報 磯野愛】

浮世絵どらやき 1個190円
(ミュージアムショップ/虎屋)



浮世絵どらやき(抹茶付き) 500円
(11階レストラン かぼちゃわいん)



オリジナル絆創膏 各250円 (ミュージアムショップ)

新寄贈寄託作品展

—花づくし

「初期浮世絵展」と同時開催の所蔵作品展として、恒例の新収蔵作品展を開催します。

今回は、近年ご寄贈あるいはご寄託をいただいた作品を中心に、「花」をテーマとして、新春らしい「花づくし」の趣向で構成し、新収蔵作品のお披露目としたいと思います。

展示の核となる第一の作品は、江戸時代後期の桜の絵です。桜の花を描くことに専心して当時評判であった三熊花顔(思考)(1730-1794)とその妹の露香による桜画が揃います。花顔は、伴嵩蹊著『近世崎人伝』の挿絵を描いた画家としても知られています。この出版が成功したことで企画された続編では、花顔が本文の執筆を担当したものの、草稿をまとめたところで急逝してしまいました。追悼の意を込めて刊行を引き継ぎ実現した嵩蹊は、冒頭に亡き友の伝記をかかげ、大坂の絵師松本奉時による桜の枝を眺める花顔の姿絵を載せています【図1】。この伝記の中に、花顔が没する前年には完成していた「桜花帖」があったことが示されていますが、今回お披露目する新寄託作品は、そのような画帖の草稿を妹・露香が兄の没後に臨写したものです【図2】。諸国を歴遊し一生をかけて桜の品種を求め続けた「桜狂」花顔が選んだ究極の三十六品とは？これは兄の意を精魂込めて伝えた妹・露香と、序跋文を高名な諸家に頼んで集めた弟・山縣蕪亭という三兄弟の力を合わせて成った、貴重なるまさに“崎”品なのです。外箱には、77歳の徳富蘇峰による堂々たる箱書があって、その強い調子が文豪の興奮を伝えるようです。

次に、「勅使河原蒼風と草月コレクションの花」と題して、草月会のコレクションと蒼風の作品をご覧ください。草月流の初代家元である勅使河原蒼風(1900-1979)以来、いけばなの枠内にとどまらない精力的な創作活動で知られる同会ですが、そうした活動を彩る

こともあったコレクションには、さすがに広く「花」に関わる作例が多くみられます。当館寄託の草月会コレクションは、所蔵作品展「勅使河原蒼風と戦後美術」(2010年)や「勅使河原蒼風とその周辺」(2004年)などですすでにご紹介してきましたが、近年、さらにコレクションの江戸時代絵画や版画も加わりました。特に今回展示する屏風群は、筆者不詳で制作事情等は未だ詳らかではないものの、いずれも江戸時代前期の作で力強い魅力に溢れたものです。例えば《椿図屏風》【図3】は、江戸時代初期の貴顕の間にまきおこった椿ブームが生んだ作例でしょう。品種名の添え書きがあり、佐賀の鍋島勝茂が寛永9年(1632)に後水尾天皇に献上し、愛好者間で早速分けられていったこともわかる有名な品種「いさはや」なども見られます。これを掌中に収めて眺めるのではなく、「椿づくし」の世界が一目でわかる場を作りだすべく屏風に仕立てられたのです。勅使河原蒼風らによる「生きた彫刻」のような自由ないけばなの提唱の背景に、古典の中にあるのびのびとした表現をキャッチし魅入られる眼があったことを知らせてくれます。草月コレクションからは村上華岳や、今井俊満、イサム・ノグチ、草間彌生らの作品もあわせてご覧いただきたいと思います。

このほか、近年寄贈寄託によって収蔵作品が増えてきた分野に文人画があり、その紹介にも務めたいと思っています。文人画家たちが描く花と木のモチーフのそれぞれに意味深い内容を味わい、さらに、摘水軒記念文化振興財団ほか個人の方々からの新しい寄託品による、初公開の珍しい役者絵や美人画という「花」もお楽しみいただければ幸いです。こうして新収蔵品として広く皆様と共有できることを喜び、ここに感謝申し上げる次第です。

[学芸係長 松尾知子]



【図1】
『続近世崎人伝』より
三熊花顔像(松本奉時/画)
寛政10年(1798)刊
当館蔵(ラヴィッツコレクション)



【図2】
三熊露香/画「桜花帖」より「いと桜」「ひとへいせ桜」
寛政9年(1797) 個人蔵(当館寄託)



【図3】《椿図屏風》江戸時代前期 一般財団法人草月会蔵(当館寄託)

新寄贈寄託作品展 —花づくし

2016年1月9日(土)▷2月28日(日)

【休館日】 2月1日(月), 2月15日(月)

【観覧料】 一般 200(160)円、大学生 150(120)円

※()内は団体30名以上

※千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※「初期浮世絵展 -版の力・筆の力-」をご観覧の方は無料

WiCAN2015 アーティストプロジェクト

ファンタスマゴリア

—千葉をうつす影—

原倫太郎 + 原游 with WiCAN



【展示の様子】

上：子ども部屋を模した空間
右：会場入り口に映し出されたタイトル



【トークイベントの様子】

上：カフェ形式でゲストの活動を紹介
中：アーティストトーク
下：アーティスト、本日のゲストを交えてのクロストーク



今年度のWiCANアーティストプロジェクトでは、原倫太郎さん・原游さんのお二人を迎え、千葉に住む人たちとその記憶をテーマとした作品「ファンタスマゴリア—千葉をうつす影—」に取り組みしました。

この作品には、3つの「うつす」がキーワードとして組み込まれています。影となる素材をカメラで「写す」、写された影を光で「映す」、そして千葉の象徴的な風景の一つといえる団地の間取りを美術館に「移す」。来場者は、懐中電灯の光で会場に設置された影を照らし出しながら、そこに様々な千葉を見つけることになります。

これらの影は、WiCANプロジェクトを担う千葉大学の学生たちが今年の活動拠点としてきた美浜区の高洲第一団地のほか、市内の小学校、美術館などで、小学生から年配の方々までを対象にワークショップを行い集められました。参加者が持ち寄った思い出の品や写真だけでなく、人々の姿や言葉もシルエットになっています。光に照らされて浮かび上がる影はゆるやかに回転し、様々なモチーフが映し出されます。それら一つ一つは個人的なものでありながら、不思議と共有可能な記憶のようにも感じられます。

12月20日(日)には関連イベントとして、「ファンタスマゴリア カフェ&トーク—アートが地域でできること—」を行い、原さんたちお二人に今回の作品についてお話いただきました。また、アーティストトークに先立ち、イベント前半には、千葉で活動しているの方々をお招きして来場者同士の交流の場を用意しました。このイベントを通して、作品のテーマである千葉に住む人たちとその記憶は、決して過去のものではなく、今現在、この地域において自分たちの手で千葉をつくり出そうとする人々によって紡がれ続けていることが、実感できたのではないのでしょうか。

〔学芸員 山根佳奈〕

ファンタスマゴリア —千葉をうつす影—

2015年12月8日(火)▷2016年1月17日(日)

【開館時間】 10:00 ~ 18:00(金・土曜日は20:00まで)
※12/25(金)、12/26(土)、1/8(金)は18:00まで

【会場】 千葉市美術館1F プロジェクトルーム

【休館日】 12/29(火) ~ 1/3(日)

【観覧料】 無料

【主催】 千葉アートネットワーク・プロジェクト(WiCAN)、
千葉市美術館

【協力】 UR都市機構

千葉市美術館でボランティア活動を始めてもうすぐ二年。浅学非才の私を時に優しく、時に厳しくご指導くださり、それぞれの得意分野の知識を与えてくださる先輩方。どんな時もあたたかく見守り、共に悩み、励まし合い、助けてくれる同期のみんな。そんな愛する仲間と囲まれて楽しく活動を続けている。

千葉市美術館でのボランティア活動は、展示室でのギャラリートーク、小中学生を対象にした鑑賞教育、木版画のワークショップなど多岐にわたっている。その中で私は主に鑑賞教育の分野で活動してきた。

絵を描くことや見るのが好きな子だけではない。美術館を初めて訪れる子、美術や図工が苦手に興味がない子、先生に連れられてイヤイヤ来る子……。そんな子どもたちと一緒に展示室で対話型鑑賞をする。

初めは興味がなくあくびをしていた子も、グループ鑑賞を進めていくうちに徐々に目をキラキラ輝かせながら作品に見入っていく。そしてさまざまな意見を聞かせてくれる。時には時間がたつのを忘れてしまうほど話が盛り上がることもある。帰りの時間になっても「まだ見たい。もう少しだけ。」と、なかなか作品の前から動いてくれない。そして「楽しかったよ！また来るね！」と言い満面の笑顔で手を振って去っていく。この瞬間、千葉市美術館でボランティア活動をしていて本当に良かったと心の底から思ひ、幸せを感じる。子どもたちの笑顔は何物にもかえられない宝物だ。

また、子どもたちとのグループ鑑賞を通して、作品の画一的ではない自由な見方を教わり、新たな一面を発見し、作品の持つ素晴らしさを再認識してさらにその作品を

好きになる。子どもたちとの鑑賞は楽しいだけではなく、私たちボランティアもたくさんの事を学び、成長させてもらっている。今ではなくてはならないライフワークの一つとなった。

今年開館20周年を迎えた千葉市美術館。この先30周年、40周年、50周年……と、私たちボランティアも美術館と共に歩み続けていきたい。千葉市美術館に栄光あれ。

[美術館ボランティア 太田美果]



展示室でグループ鑑賞の準備をするボランティアメンバー

2016 年度 展覧会のお知らせ

生誕140年 吉田博展	4月9日(土)ー5月22日(日)
河井寛次郎と棟方志功	7月2日(土)ー8月28日(日)
見立ての手法 —岡崎和郎のWho's Who	9月7日(水)ー10月30日(日)
小川信治展	9月7日(水)ー10月30日(日)
文人として生きる —浦上玉堂・春琴・秋琴父子の芸術世界	11月10日(木)ー12月18日(日)
ブラティスラヴァ世界絵本原画展 —絵本の50年 これまでとこれから	2017年1月4日(水)ー2月26日(日)

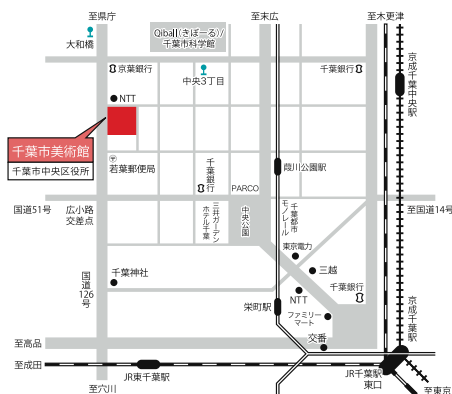
※都合により予告なく展覧会名、会期、内容の一部が変更となる場合がありますのでご了承ください。



吉田博《帆船朝》
大正15年(1926)
千葉市美術館蔵



浦上玉堂《蓮華雪華図》
文化5-8年(1808-11)頃
西谷コレクション



[開館時間]

10:00-18:00 (毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[交通案内]

◎JR千葉駅東口より

○徒歩約15分

○バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて

「中央3丁目」下車徒歩3分

○千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分

◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く

◎地下に駐車場があります

[編集・発行]

千葉市美術館

〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8

TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733, Japan

<http://www.ccma-net.jp/>

[発行日] 2016年1月11日

[印刷] 株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art